ミュージアム通信

Shu Ogawara

小川原脩記念美術館　倶知安風土館
☎ 21-4141　☎ 22-6631

開館時間は 9 時～ 17 時
（入館は 16 時 30 分まで）

12 月の休館日
1 日（展示替え休館）、5 日、12 日、19 日、26 日、30 日～ 1 月 5 日（年末年始休館）

展覧会のお知らせ

■常設展示

「小川原脩展　アジアの街角で」

小川原脩は晩年の大きな転換点ともいえるアジアへの旅で、中国桂林、チベット、インドのそれぞれの風物に、鮮烈な印象を受けました。小川原脩が描いた、アジアの街角で人と動物たちが繰り広げる悠々とした時間。あたたかな色彩に包まれた作品をどうぞご覧ください。

会期：12 月 2 日（土）～平成 30 年 4 月 15 日（日）

■企画展示

「徳丸晋 写真展『水面』－ minamo －」

倶知安町在住の写真家・徳丸晋さんの写真作品「minamo」シリーズを紹介します。フィールドとする半月湖は倶知安町の豊かな自然を象徴する場所とも言えます。独自の視点で水面の色彩の変化を捉えた徳丸晋さんの作品世界との出会いをお楽しみください。

会期：12 月 2 日（土）～平成 30 年 2 月 4 日（日）

アート・イベントのお知らせ

■アーティスト・トーク

「徳丸晋の写真世界そして minamo」

10 年以上にわたり、羊蹄山麓に佇む半月湖の水面を撮り続ける徳丸晋さん。展覧会のオープン記念として、ご自分の作品についてさまざまな角度からお話ししていただきます。

日時：12 月 2 日（土）10 時～
講師：徳丸　晋さん（写真家）　会場：当館第 2 展示室（無料）

■土曜サロン　アート探訪〈みて☆きいて〉9

「クレー　色彩の管弦楽」

スイスのベルンに生まれ、美しい色彩と豊かな想像力により叙情的な抽象世界を生み出したパウル・クレー。音楽家でもあったクレーの実像を、残された作品や遺留品から探ります。

日時：12 月 9 日（土）14 時～ 15 時
お話し：柴　勤（当館館長）　会場：当館映像ルーム　聴講無料

■アート・シネマ館

「シャネル ＆ ストラヴィンスキー」2009 年 /119 分 / フランス（字幕）

パリ、1913 年。ロシアの天才作曲家ストラヴィンスキーの「春の祭典」の初演は、観客の罵声と怒号に包まれましたが、その客席には、まだ若きココ・シャネルの姿もあったのです。二人の運命は？

日時：12 月 16 日（土）14 時～ 16 時 10 分
お話し：柴　勤（当館館長）　会場：当館映像ルーム　聴講無料

■ミュージアム・コンサート

「クリスマス・キッズ・コンサート　2017」

毎年恒例のキッズが主役のクリスマス・コンサート。多くのお子さんの楽器演奏、歌声をお楽しみください。また、オジサン・グループの特別出演やサンタさんからのプレゼントもあります。

演奏：町内の各小学校・音楽教室の皆さんなど
対象：お子さまから大人までどなたでも
日時 :12 月 23 日（土・祝）17 時 30 分～ 19 時 30 分
会場：当館第 1 展示室（無料）

▲昨年のコンサートの様子

美術と社会

「ミリキタニの猫」。ニューヨークで路上生活を送る日系アメリカ人画家のドキュメンタリー映画。日本名、三カ谷勉。カリフォルニアに生まれ、少年時代を両親の故郷広島で過ごすものの、世界と日本を結ぶ芸術家を夢見て帰国。しかし、第二次大戦が始まると強制収容所に送られ、アメリカの市民権も失う。ここで歯車が狂った。

冬の凍てつく夜も段ボール箱が終の棲家。昼間は路上、公園をアトリエに、ひたすら猫を描き続ける 80 過ぎの、自称グレート・アーティスト。自分の道を邁進する姿には言葉を失う。ここにも一人、小川原脩同様、戦争に翻弄された画家がいる。一方では、その苦境を乗り越える美術の底力を、改めて思い知らされもした。

館　長　柴　勤（つとむ）

感動の場 ー点

『鴉と壺』

1989 年　小川原　脩　画

小川原脩が描いた動物は「馬・犬・おおはくちょう」に代表されるが、実はカラスも、白鳥と並ぶほど多くの作品に登場している。カラスは 1940 年代のシュルレアリスムの作品群にも登場しているが、頻繁に描かれるようになったのは 1986 年、75 歳でインドを訪れて以降である。彼がインドで見たカラスは、私たちが日頃見ている種類とは少し違った特徴のある、首のあたりが白っぽいカラスだった。

そのカラスが一羽、大きな丸い壺に留まっている。インドではガンジス河は聖なる河であり、その聖なる水を入れるための壺だそうだ。小川原はガンジス上流のハリドワールやリシケシュを訪れ、直径が 50 センチ以上もある球体の素焼きの壺が売られているのを見て、ひどく心に残ったと記している。

口の細い壺がふたつ、球の大壺がひとつ、顔の向きや足の角度に、微妙な違いのあるカラスが 3 羽。それぞれの形は単純化され、古代エジプトの絵文字、はたまた音符の様でもある。音楽家であったなら、この 6 つの音符で、旋律が出来上がるのかもしれない。

文：沼田　絵美（小川原脩記念美術館　学芸員）

ふるさと探訪

416 回

―ヌーとエゾシカ 決死の大移動―

テレビや絵本でもおなじみ、「ヌーの大移動」をご存知でしょうか。膨大な数のヌーが地平線から地平線まで延々と群れをなし、1500㎞以上の距離を移動するのです。草原にはライオン、川にはワニが獲物の到来を察知して集まり、命を狙っているにも関わらず。

なぜ、彼らは大移動するのでしょうか。アフリカの気候には雨季と乾季という二つの時期しかありません。ヌーたちは乾季になると飲み水と草（食糧）を求め、湿潤な地域に集合することになりますが、そのような高密度状態では、雨季になる頃には草は食べ尽くされます。今度は繁殖に耐えうる栄養を求め、手つかずの草を求めて移動しなければなりません。大移動の理由は、草と水、そして繁殖のためなのです。

▲秋、エゾシカの足跡（町内大和）

ところで、倶知安にもヌーと同じ有蹄類のエゾシカがいます。近年、倶知安でのエゾシカ目撃情報は増えているようです。目撃情報のほとんどは春から秋にかけてで、冬はめっきり減ります。どうやら、倶知安に生息する個体数は季節的に変化しているようです。

実は、エゾシカもヌーと同様、季節的に移動する習性を持ちます。春に倶知安へ訪れたエゾシカは、秋には倶知安を去り、雪の少ない地域で越冬していると考えられます。倶知安のような多雪地では移動が困難なうえ、ササなどの食料が雪に覆われてしまうため、生きていけないのです。それでも春に倶知安を訪れるのは、豊富でおいしい草を好きなだけ食べられるからです。

想像してみてください。私たちの住む北海道で、私たち人間よりも大きな体を持つエゾシカ、推定 100 万頭弱が毎年何十 ㎞ も行き来している様を。自然の中には、目を凝らして見なければ気付かないような小さなものがある一方、ダイナミックすぎて捉えきれないものもあるのです。

文：上井　達矢（倶知安風土館　生涯学習専門員）